

第5回日本 HTLV-1 学会学術集会参加報告

伊藤 さやか*

はじめに

第5回日本 HTLV-1 学会学術集会が、2018年8月31日から3日間、東京都千代田区にある学術総合センター(一橋講堂)で開催された。大会長は免疫学に造詣の深い東京医科歯科大学・免疫治療学分野の神奈木真理教授が務められ(写真1)、「HTLV-1 関連疾患の理解から予防・治療への新たな展開」をテーマに、臨床・基礎の両研究領域から予防法や治療法の開発を見据えた免疫研究に重点を置いた学術シンポジウムが組まれた。日本 HTLV-1 学会は、研究者・医師・患者・キャリア

が協力して、HTLV-1 対策に取り組むために、2008年に「HTLV-1 研究会」として発足された。そして、6回の研究会/シンポジウムを経たのち、2013年に「HTLV-1 研究会」を母体にして「日本 HTLV-1 学会」が設立され、今年の学術集会が第5回となる、まだまだ若い学会である。本稿では、その学術集会に参加し、学んだこと、気づかされたこと、再認識させられたことなどを取り上げてみようと思う。

I. HTLV-1 感染と疾患

ヒト T 細胞白血病ウイルス 1 型 (Human T-cell



写真1 第5回日本 HTLV-1 学会学術集会スタッフの集合写真

*東京工科大学医療保健学部臨床検査学科、東京医科歯科大学医歯学総合研究科免疫治療学分野 itohsyk@stf.teu.ac.jp

leukemia virus type 1 : HTLV-1)は、後天性免疫不全症候群(AIDS)を惹き起こすヒト免疫不全ウイルス(HIV-1)と同じレトロウイルス科に属する一本鎖RNAウイルスである。HTLV-1感染者は、世界で約2,000万人存在し、日本・カリブ海沿岸地域・アフリカ中央部・南アメリカ・ソロモン諸島などに分布している。本邦では、約110万人の感染者が存在すると推定されており、沖縄、九州などの日本南西部に加え、東京、大阪、名古屋など、都市部に感染者が多い。これら感染者のうち多くは、生涯にわたり無症候で過ごすが、約5%の感染者は、CD4⁺T細胞の悪性腫瘍である、成人T細胞白血病・リンパ腫(ATL)を、約0.3%が進行性の慢性炎症性脱髄性疾患である、HTLV-1関連脊髄症/熱帯性痙性麻痺(HAM/TSP)を発症する。これらの疾患は免疫学的に対照的であり、ATLではHTLV-1に対するT細胞性免疫が損なわれており、HAM/TSPでは恒常的な活性化が認められる。このように1つのウイルスが、免疫学的に対照的な疾患を惹き起こす点で、非常に興味深いウイルスである。

II. 感染流行地域とHTLV-1研究者

HTLV-1と同じレトロウイルス科に属するHIV-1の感染は、世界中に広がっているため、世界各国に研究者が多数存在する。一方、HTLV-1

感染は地域特異性があり、必然的にその研究者も感染流行地域で多く、非流行地域では少なくなるのは想像に難くない。我が国は、感染流行地域の中でも先進国の1つであり、その疫学研究や免疫学的研究で最先端の一角を担っている。興味深いことに、日本HTLV-1学会に参加された先生の所属機関にもその地域に偏りが見られ、患者の多い九州・沖縄地域、関西、関東圏の研究者が大半を占めていた。日本での流行地域を考えると当然ではあるが、ここまで研究者の地域偏在性が色濃く出ている学会はなかなかない。

III. 第5回日本HTLV-1学会学術集会

日本HTLV-1学会は、1つのウイルスに関する学会であるため研究分野も狭く思われるかもしれないが、実際の演題内容の分野は多岐に渡り、臨床研究、基礎研究、検査、疫学、感染防御・母子感染、動物モデルなどが挙げられる。割合としては臨床研究が多くを占めている。

ATLは今日でも極めて予後不良な造血器腫瘍の1つであり、その治療には化学療法や移植が広く選択されている。これらの治療法は日々ブラッシュアップされているが、新たな治療方法も模索されている。今回の学会でも抗体医薬、放射線治療や樹状細胞療法の効果などについての報告が多数見受けられた。特に抗体医薬については、新規



写真2 一般口演の様子



写真3 ポスター会場の様子

薬剤や併用の効果なども紹介されており、今後も抗体医薬の報告は増えることが予想された。

また、HTLV-1の動物モデルには、ヒト血液細胞を構築させたNOGマウス(ヒト化マウス)、HTLV-1の蛋白質をコードする遺伝子を導入したトランスジェニックマウス、HTLV-1持続感染ラットモデルなどが使用されており、それらを用いて、HTLV-1蛋白質の役割、T細胞の機能や抗体医薬の効果など様々な報告がなされていた(写真2)。さらに、HTLV-1に近縁であるサルT細胞白血ウイルス1型(Simian T-lymphotropic virus type 1:STLV-1)に自然感染したニホンザル(自然感染率は約60%)や、HTLV-1感染カニクイザルなどを用いた動物モデルの有用性が検証されており、霊長類モデルの発表が多く見受けられた。近い将来、新規治療法・発症予防法・感染予防法について、ヒトに近い霊長類モデルで評価できるようになることを期待したい。

IV. 懇親会・国際学会の案内

国際ヒトレトロウイルスHTLV会議は隔年で開催されており、今まで、フランス、カナダ、ブラジルなどで開催されているが、日本での開催が最多である。来期の第19回国際ヒトレトロウイルスHTLV会議は、2019年4月にペルーのリマで開催されるため、その告知に大会長である Eduardo Gotuzzo 先生が懇親会に参加された。「日本人研究者の参加が増えると、学会がより活性化するのは是非参加を！」との言葉を頂いた。日本からペルー

まではほぼ丸一日移動にかかるため参加を躊躇してしまいが、遠い地の学会だからこそ、知り得る情報もあるかと思ひ参加したくなった。また、ポスター発表で大いに議論が交わされた後(写真3)、懇親会において、九州の希少な焼酎や沖縄の泡盛など、HTLV-1学会ならではの「おもてなし」がなされ、賑やかな会となった。

V. 公開シンポジウム

公開シンポジウムは学会参加者以外にも一般の無料参加が可能であり、患者やその家族が加わった会となる。今年度は「HTLV-1感染者のサポートに必要なもの」と題され、開催された。平成23年度からHTLV-1抗体検査が妊婦健康診査の標準的検査項目に追加されて今年で7年目となる。妊婦健診や献血、親兄弟のHTLV-1関連疾患発症などを機に、家族や自分自身にHTLV-1感染が発覚すると、その感染様式(母子感染、性交感染などの水平感染)を考慮して、多くの近親者の感染状況を知ることが必要になってくる。しかしながら、非流行地域の保健所や病院などでは、HTLV-1に対する知識がまだ不十分であり、検査は実施できてもその後の対応ができないなどの施設側の問題が提起され、また患者親族側からも、そういった地域・施設で検査を受けられず、結局どこで検査を受けられるのか分らなかったといった課題などが議論の中心となり、できるだけ早い体制の強化が求められていることがわかった。

VI. 世界 HTLV デー

世界レベルでのエイズのまん延防止と患者・感染者に対する差別・偏見の解消を目的に、世界エイズデー(World AIDS Day: 12月1日)がWHOによって1988年に制定されている。しかしながら、HTLV-1に関してはそのようなものはなかった。そこで今年度から、日本HTLV-1学会では、11月10日を「世界HTLVデー」として、WHOの認定する「International Day」への登録に向けて活動を開始した。これらの推進に貢献することを目的に、シンボルとなるロゴマークとキャッチコピーが2019年春には決定される。様々な活動を通してHTLVに関する正しい認識が更に高まることを期待する。

おわりに

今回、第5回日本HTLV-1学会学術集會に参加させて頂き、新規抗体医薬や細胞治療の開発、次世代シーケンサーによる網羅解析、霊長類モデルの登場など、HTLV-1研究が確実に進捗していること、それに伴って新しいトピックが次々と生まれていることを再確認することができました。また、無症候キャリアや患者、その親族を交えての討論では、研究者だけでは成しえないHTLV-1感染者に対する社会体制の整備や医療体制の推進に、患者の参加がより拍車を掛けていると感じられました。最後に、本稿執筆の機会を頂きましたことを心より感謝申し上げます。